

＜社会科＞

学ぶ楽しさ・自己の高まりを実感できる社会科学習の在り方 ～自己調整しながら、主体的に学び合う授業を目指して～

揖斐川町立大和小学校 教諭 栗田 実紀

概要

現在、個別最適な学びを実現することが推進されているが、そのために注目されているのが自己調整学習である。自己調整学習とは、自分の学びを自分で選択することを繰り返して、自分に合った学びのスタイルを確立していくことである。本研究は、「動機づけ」「学習方略」「メタ認知」という自己調整学習の3つの要素を社会科の授業に取り入れた実践である。自己調整を続けていくことで、児童が「楽しい！」「できる！」と感じ、主体的に学び合う授業ができるのではないかと考えた。そのために導入で動機づけをし、終末までその意識を継続させるための単元構成を考えた。また、展開では社会科の見方・考え方を身に付け、自分の学びやすい方法で個人追究を進めるための工夫を行った。終末では自己の高まりを実感するための振り返りの場を設定した。このように、自己調整学習を続けていくことにより、自分に自信がつき、楽しみながら前向きに授業に取り組むことができるようになった。また、そのように主体的に学ぶことで確かな学力の定着にもつながった。

1 主題設定の理由

(1) 校内の研究主題から

本校では、「自己調整しながら主体的に学ぶ子の育成～算数科を通して自立・協働できる子を育てる～」という研究主題に沿って、算数科の研究を進めている。本校が算数科の研究を始めて4年、私自身本校に赴任して3年目の今年、研究主題のキーワードである「自己調整」について深く考える年になった。「自己調整」とは、自分の学びを自分で選択することを繰り返して、自分に合った学びのスタイルを確立していくことである。現在、「個別最適な学び」を実現するために、重要な要素として注目されている。このように、算数科において、「自己調整しながら主体的に学ぶ」ことを目指している中、「社会科での自己調整とは一体何だろう」という1つの疑問が湧いてきた。社会科でも自己調整をすることで自分の学びのスタイルを見つけられるのではないかと考え、自分に合った学び方をしてほしいと思った。そこで、自己調整しながら主体的に学び合う社会科の授業を目指して、本研究を行った。

(2) 児童の実態から

本校は全学年単学級であり、中でも5年生は男子9名、女子2名、計11名という少人数集団である。4月当初、授業の様子から、教科によって意欲の差が大きいと感じた。特に社会科の授業ではノート記述や挙手発言が少なく、社会科に苦手

意識をもっている児童が多いことが分かった。

そこで5年生11名を対象に、5つの設問についてアンケートを実施したところ、以下のようない結果であった。＜表1＞◎が「そう思う」、○が「どちらともいえない」、△が「そう思わない」という3段階での回答とした。

		◎(人)	○(人)	△(人)
1	社会科の学習は好きですか。	4	4	3
2	社会科の学習に興味はありますか。	3	3	5
3	資料の読み取りは得意ですか。	2	7	2
4	社会科の学習は将来役に立つと思いますか。	6	3	2
5	今年1年で社会科の力を伸ばしたいと思っていますか。	6	5	0

＜表1＞社会科学習アンケート結果
5年生実施（11名）R5.4実施

結果から、「社会科の学習が好きだ」と答える児童は半数以下であった。この結果から、2つの課題が明らかになった。1つ目は、社会科の学習に興味をもっている児童が少なく、学ぶ楽しさを十分に感じていないことである。2つ目は、社会科の学習において重要な、資料の読み取りを

苦手としている児童が多いことである。

そこで、資料の読み取り方・自分に合った学びのスタイルが分かれれば、「できる」という実感が湧き、自己の高まりを感じられるようになるのではないかと考えた。また、児童に社会科の楽しさを何とか感じてほしいという思いで、以下の仮説を立てた。

2 研究仮説

社会科の自己調整学習を工夫することにより、学ぶ楽しさや自己の高まりを実感でき、主体的に学ぶ児童が育つであろう。

3 研究内容

【研究内容1】単元構成の工夫

- (1) 動機づけを行うための導入の在り方
- (2) 地域につながる終末の在り方

【研究内容2】見方・考え方を育てる学習活動

- (1) 読み取り方の例示
- (2) ノート作りの工夫

【研究内容3】指導・評価の工夫

- (1) 単元における振り返り

4 研究実践

アンケートの回答や4月当初の授業態度などからA児を抽出児とし、以下のような捉えから実践を行い、方途の有効性について検証していく。

A児の実態	A児に願う姿
<ul style="list-style-type: none">・社会科の学習を好きではないし、興味をもてていない。・「社会は暗記する」科目だと思っている。・根拠を明らかにするのではなく、思いつきや想像で話すことが多い。	<ul style="list-style-type: none">・社会科への関心を高め、主体的に学習する姿。・資料を正しく読み取り、事実を明確にして考える姿。・学んだことをもとに、社会とのつながりを考える姿。

【研究内容1】単元構成の工夫

(1) 動機づけを行うための導入の在り方

自己調整学習の要素の1つに、動機づけがある。動機づけとは、学習への興味を喚起することであり、「内発的動機づけ」と「外発的動機づけ」の2種類がある。この「内発的動機づけ」は、授業の導入で高められると考えた。「おもしろそう」「やってみたい」と児童が思うことができれば、45分間の授業を意欲的に行うことができる。主

体的に学び合う授業にするためには、まず児童が教材に興味をもち、「学びたい」という意欲をもつことが重要である。そこで以下の実践を行った。

[実践例1] 「低い土地のくらし」

「低い土地のくらし」の学習では、岐阜県海津市を取り上げている。本校の児童は、海津市を訪れたことのない児童が多いため、この地域の特徴である「3つの川に挟まれていること」「土地が低いこと」といった2点を実感するには、教科書の資料だけでは難しいと感じた。

まずは写真から分かる特徴を見つけ、ノートに書き出すよう指示した。「3つの川に挟まれていること」は写真から分かったが、「土地が低いこと」については実感していない様子だった。NHK for schoolを利用し視覚に訴えることで、土地の高低差を深めることができた。遠くの地域の教材でも児童が身近に感じ、さらに驚きや興味をもつて追究できた。

[実践例2] 「自動車をつくる工業」

「自動車をつくる工業」の学習では、企業の力を借りた。自動車は、バスや電車が整備されていない揖斐川町で、移動するために最も便利な手段である。児童にとっては身近なものであるため、はじめは自動車工業への興味が薄かった。そこで、日産の「日産キッズアドベンチャー」というホームページにある「車ができるまで」という動画を単元の第1時に視聴した。視聴した理由は2つある。1つ目は、この単元でどのようなことを学んでいくのかという見通しをもつためである。2つ目は、自動車工業について少しでも興味をもてるようにするためである。実際に車が作られるところを見たことのなかった児童は5分間とても集中して見ることができた。その後、学習を進めていくうちに、「1番初めに見たところだ!」「実は〇〇な工夫がされていたんだね。」といった声があがつた。第1時の学習が、単元を通して生きていることを実感した。

2つの実践から、視聴覚教材を目的をもって、適切なタイミングで活用することの重要性を改めて感じた。

(2) 地域につながる終末の在り方

次に導入で、児童の「おもしろそう」「やってみたい」という気持ちを引き出してから、授業の終末まで興味をもち続けていくための方途を考えた。

まず、学んだことを単なる知識とするのではなく、自分事として捉えられるようにしたいと思つ

た。そこで、「遠くの地域の教材から学んだことは、私達が住む地域でも同じであるのか」ということを実証することにした。

【実践例3】「米づくりのさかんな地域」

「米づくりのさかんな地域」の学習では、山形県にある庄内平野を取り上げている。庄内平野では、米の生産性を高めるために、耕地整理を行っている。教材研究を進めていくうちに、揖斐川町大和地区でも行われていたことが分かった。そこで、終末において、大和地区の昔と現在の様子を比べる活動を仕組んだ。<図1>



<図1> 昔と現在の本校の周辺の様子

写真中央に見えるのが本校である。自分たちの通う学校を見つけ、その周辺の様子を比較することで、児童は生産性を高める工夫はどの地域でも行われていると知り、新たな学びを得たことで、より意欲的に授業に取り組むことができた。

A児のまとめ

米の生産性を高めるために、機械を使ったり水を調節したりすることは、どこの地域でもやっている。機械や水路など昔にはない工夫をして米作りをしてきた。

A児の本時のまとめを見ると、「米の生産性を高めるための工夫は、庄内平野だけではなく、どこでも行われている」ということに気付くことができていることが分かる。

【実践例4】「水産業のさかんな地域」

「水産業のさかんな地域」の学習では、岐阜県に海がないということから、特に自分事として考えにくい部分があった。しかし、養殖漁業や栽培漁業が現在はさかんに行われていることを学び、「これなら海の近くじゃなくてもできそう」というつぶやきがあった。このつぶやきから、私たちは関係ないと考えるのではなく、自分事として捉える姿が感じられた。実際、揖斐川町の隣の池田町にある池田温泉では、とらふぐと車えびの養殖漁業が行われている。現地で写真を撮らせてもらったことがあったので、授業の終末に紹介した。

実際に養殖している方が、「将来、スーパーの広告に岐阜県産のふぐやえびが登場することが今の夢！」と話していたことを伝えると、「ぼくそれ買う！」といった声があがった。揖斐川町でも購入できることを知り、水産業を身近に感じることで、学びが自分事になり、社会生活や日常生活に生かされていくと実感した。

【研究内容2】見方・考え方を育てる学習活動

(1) 読み取り方の例示

自己調整学習の2つ目の要素に「学習方略」が挙げられる。「学習方略」とは、効果的に学習するための方法や工夫のことである。内発的動機づけをした後、さらに主体的に学びに向かうために、次に学習方略に注目した。

社会科学習の中心である児童の見方・考え方が最も発揮される場は、個人追究である。毎時間7分個人追究をする時間を持っているが、読み取り方や読み取りの視点が分からなければ、意欲の低下につながる。また、読み取り方が分からなければ、自己調整しながら学ぶこともできない。そこで、読み取り方の定着を図るため、<図2>を提示した。



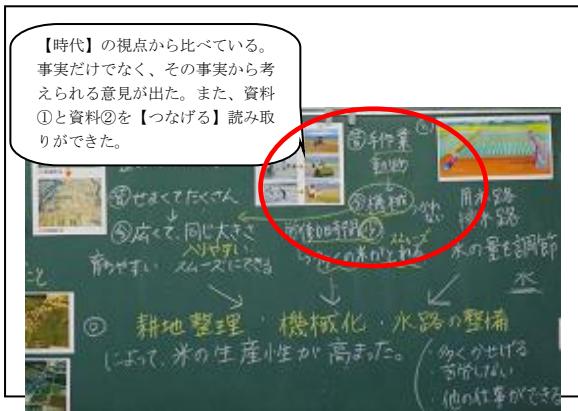
<図2>読み取り達人

読み取り方を3段階で示した。はじめは「①はつきり」ができる目標にした。資料を1つずつ見ていくことで、その資料から分かる事実を明確に読み取るようにした。また、注目するとよいところを大きく4つの視点として示すことで、資料のどこに注目すればよいかが分かるようになった。

回数を重ねることで自信をつけていくと、「②つなげる」「③くらべる」という見方ができるようになった。「②つなげる」では、ノートに線を引き、2つの資料から分かることを導き出せるようになった。「③くらべる」では、ノートを見返して、前回までの授業と比べながら、資料を読み取ることができるようになった。<写真1>

単に資料の読み取りができるようになっただけでなく、新たなことを知ったり考えたりする楽しさや、学ぶ価値を実感できた。内発的動機づけがより強固なものになり、社会の授業により前向き

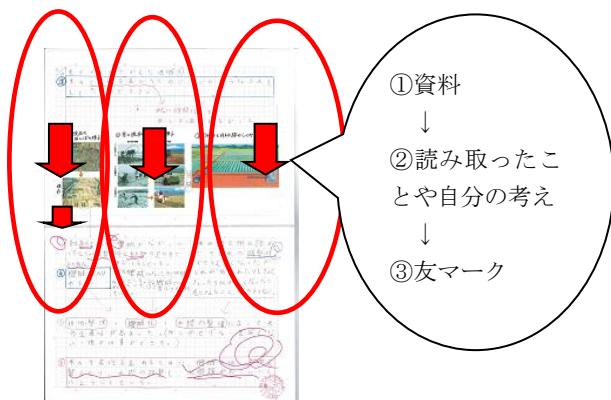
に取り組むことができるようになった。



＜写真1＞ 視点から広げていく板書

(2) ノート作りの工夫

学習方略の2つ目として、ノートの書き方に注目した。5年生の5月頃から、社会科でのノートの使い方を変更し、1時間で見開き1ページ（左右ではなく上下見開き）を使うようにした。黒板に掲示した資料と同様のプリントをノートに貼り、その下に自分が読み取った事実やその事実から考えたことを記入するようにした。＜写真2＞すると、2つのことで効果が見られた。



＜写真2＞児童のノート

1つ目は、児童自身の思考の流れを止めないことである。本校では、どの教科でも統一して、全体交流の際に出た仲間の意見を「友マーク」という記号を使い、ノートに残している。そのため、自分の意見と仲間の意見がつながるように残していくことができ、さらに深い考えをもつことができるようになった。

2つ目は、自己調整しながら学びやすいことである。自己調整学習の3つ目の要素に、「メタ認知」が挙げられる。「メタ認知」とは、自分自身を客観視して分析することである。

そこで、自分自身の学び方をコントロールし、学びやすいように学習を進め、より主体的に学ぶ姿を目指した。

資料を横に並べ、思考を縦につなげることで、資料①から必ず順番に読み取らなければならないという思いが軽減した。読み取る順番が変わっても、後から資料①に戻って書くことが容易になつたからである。

メタ認知ができるようになると、自分に合った学びのスタイルを見つけ、確立していくことができる。メタ認知は大きく2つの段階に分けられる。

・モニタリング

→自分自身を客観的に観察して課題を認識する。

・コントロール

→課題を自覚したり、行動を改善しようとしたりする。

社会科の学習を進めていくうちに、「ぼくは棒グラフや円グラフなどのグラフから変化を読み取ることが得意！」「私は写真から特徴を見たり、お話を読み取ったりすることからやりたい。」など、自分の得意な学び方を見つけて、自身をモニタリングしながら、自分の学びやすいように学び方をコントロールする姿が身に付いた。A児の資料の読み取り方は、次のように変化した。

A児の変化

・資料①から読み取ろうとし、分からないと手が止まっていた。

↓

・棒グラフや折れ線グラフから読み取る時には、特に変化が大きいところに丸や矢印などをつけるようになった。

↓

・「どんどん増えている。」という曖昧な記述から、「1965年から2018年にかけて○○万台増えている。」など具体的な数値を示して書くようになった。

↓

・資料を見て、自分の読み取りやすい順番で書き始め、矢印で資料をつなげるようになった。

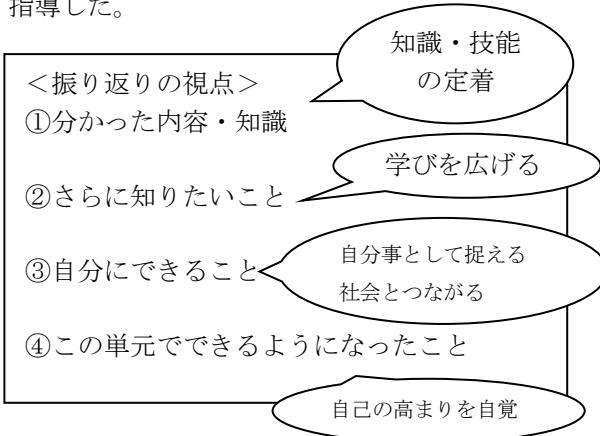
A児は毎時間、自己調整学習を積み重ね、確実に資料から事実を読み取る力をつけた。また、他の児童も、同様に学習を積み重ねていくうちに、自分自身をモニタリングし、コントロールすることができるようになった。

【研究内容3】指導・評価の工夫

(1) 単元における振り返り

まとめの他に、振り返りを書く時間を毎時間とすることはできないので、単元終末に単元全体の振り返りを行ってきた。振り返りでは、分かったことなどの知識だけでなく、自己調整学習を通して培った「自己の高まり」まで考えられるようにしたいという願いをもった。また、振り返りを書きやすいようにするために、岐阜県小学校社会科研究部の主題「よりよい社会の実現を目指す子が育つ社会科学習」を参考に、振り返りの視点を考えた。児童が自分と社会のつながりを感じながら問題を解決していく中で、これから社会への関わり方や自らの生き方を考えていけることを目指した。

そのために以下のような①～④の視点を示し、それぞれの視点に沿って記述していくよう児童に指導した。



ここで、A児の単元の振り返りを取り上げる。

A児の振り返り			
「自動車をつくる工業」			
①	外国にも工場を建てて、現地生産をすることで、日本は余分なお金を払わなくても済むし、外国は日本の技術をまねできることが分かった。		
②	これから先、どんな車を作ろうとしているのか知りたい。		
③	(なし)		
④	資料をくわしく読み取ることができるようになったし、まとめを自分の言葉で書けるようになった。		

この振り返りから、A児は現地生産について、日本だけでなく、相手国の立場にも立って、両方の視点で考えることができ、「②つなげる」「③くらべる」という社会的な見方・考え方方が身に付いていることが分かる。また、近年環境や人に優しい車が開発されていることを知り、今後の開発

に興味をもつことができた。「③自分でできること」については書けてはいなかったが、A児と話していくうちに「ぼくは将来、燃料電池自動車や電気自動車に乗りたい」などと、自分でできることを社会情勢とつなげて、考えることができていた。また、自己の高まりについても、自覚があるようで、すらすら書くことができた。

A児以外にも、4つの視点を示して、振り返りを書くことを続けていくことで、岐阜県小学校社会科研究部が大切にしている「自分と社会とのつながり」について書く児童が増えた。また、日々の授業では、なかなか自己の高まりを実感しにくいが、単元を終えて自分のノートを振り返り、学びの跡を辿ることで、自分が成長していることを実感することができた。

他の児童の振り返り

「これからの食料生産とわたしたち」

- ①食料自給率を高めるために、各地で地産地消の取り組みが進められていることが分かった。
- ③食料自給率が低くなっていることを初めて知って、やばいと思った。これからできるだけ国産の物を食べていきたい。
- ④4年生の時よりも、ノートに読み取ったことをすらすら書けるようになったし、よく発表できるようになったので続けていきたい。

5 成果と課題

＜単元テストの結果から＞

5年生1学期の観点別到達率・総得点到達率と、2学期の結果を比べた。＜表2＞

①5年生全体

1学期	知識・技能	思考・判断・表現	合計
	86%	85%	85%
2学期	知識・技能	思考・判断・表現	合計
	90%	91%	91%

↓

2学期	知識・技能	思考・判断・表現	合計
	90%	91%	91%

②抽出児A児

1学期	知識・技能	思考・判断・表現	合計
	83%	93%	88%
2学期	知識・技能	思考・判断・表現	合計
	93%	93%	93%

↓

＜表2＞観点別到達率・総得点到達率

以上の結果のように、学ぶ楽しさや自己の高まりを実感できる授業を目指し、自己調整学習を続けてきた結果、知識の定着や学力の向上にもつながった。5年生全体の結果を見ると、総得点到達率は、6%上がっている。また、A児は知識・技能の面において、10%上がっている。1学期は学級平均に届いていなかったが、2学期の単元テストには全国平均と比較して、高い点数がとれるようになった。個人追究に自信がつき、主体的に学びに向かうことができるようになり、上記の結果につながった。

＜アンケートの結果から＞

主体的に学び合う授業を目指していたので、アンケート項目の設問2に注目した。

2	社会科の学習に興味 はありますか。	3	3	5
↓				
2	社会科の学習に興味 はありますか。	6	4	1

4月は、社会科の学習に興味がなく、苦手意識をもつている児童が全体的に多かった。様々な実践をし、10月にもう一度同じアンケートをした結果、「○=そう思う」と答えた児童は6人、「○=どちらともいえない」と答えた児童は4人に増加した。

A児は、4月は設問1も設問2も△と答えていたが、10月にはどちらも○と答えている。自己調整学習により、自分の学びのスタイルを見つけ学び進めていくことで、自分は「できる」と思えるようになった。社会科への興味関心が以前より高まったことが分かる。

上記2つの結果を踏まえて、各研究内容について成果と課題を次のようにまとめた。

○授業の終末において、本時学んだことを自分達の地域につなげることで、学びが自分事となり、導入で感じた「おもしろそう」「やってみたい」という意識をもち続けることができた。

○読み取り方の例示をしたことで、資料をつなげたり比べたりできるようになり、社会科の見方・考え方を育てることができた。

○学習方略を工夫したことで、自分の得意な資料から読み取ったり、印をつけながら読み進めたりするなど、自己調整しながら主体的に学ぶ姿が増加した。

○単元における振り返りを毎単元積み重ねていくことは、自己調整学習で培った自己の高まりを実感し、自ら社会に関わろうとする児童の育成

に有効であった。

●地域の様子や社会情勢は常に変化している。今後も、児童が興味をもったり、イメージしやすいようにしたりするための教材を模索し、開発していく必要がある。

●読み取り方の例は、今の児童の実態に合わせて作ってあるため、「①はつきり」「②つなげる」「③くらべる」の3段階を常に見直し、レベルアップさせていく必要がある。

6 おわりに

最近、授業が始まる前には「やったー！今日社会の授業がある！」、授業が終わった時には「なんか45分があつという間だった！」という発言が聞こえてくる。4月、何とか社会科を学ぶ楽しさを感じてもらいたいという思いから、様々な実践に取り組んできたが、児童が楽しそうに興味をもって、授業に取り組む姿を見ることが何よりうれしいし、実践の成果であるように感じる。A児の保護者からは、個人懇談の際に「5年生になってから、社会のテストを見せるだけじゃなくて、見せながらいろいろ説明してくれるんですよ。なんだか楽しいみたいです。」という話をしていただいた。今後も、学ぶ楽しさや自己の高まりを実感するために、自己調整学習について実践を進めていきたい。

7 参考文献

- 文部科学省「学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料（令和3年3月版）」
- 岐阜県小学校社会科研究会https://gifu-syosyaken.com/wp-content/uploads/2023/07/9e2453153f07497bd17A_62dA_5A_3bA_62e.pdf
- ・神藤貴昭「自己調整学習論の可能性－動機づけと個人差にかかる課題に焦点を当てて－」

＜講評＞（最終頁の最後11行は空白とすること）

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11